



繪本寫寶袋

三

~~P  
278  
8~~

逍遙文庫  
文庫6  
1293  
3



法中寫字卷之三之卷目錄

源義家追安倍自任

系正歌と射る書

為朝与義射我書

真面と一勇力之書

文賞上流の書

加茂次系庵之書

三浦大介之書

宗任和歌圖

保元右軍之書

源賴政射鸕書

川津役野お撲之書

伊豆院宣之書

金子十郎之書

難波梅刺札之書



梶原二交絶之書

教壇欲捕義經書

辨た又案後了書

安宅園之書

和法奈草摺之書

志度孫宿元之書

合那王之書

堀河親付之書

時宗大儀(詔)之書

源義家

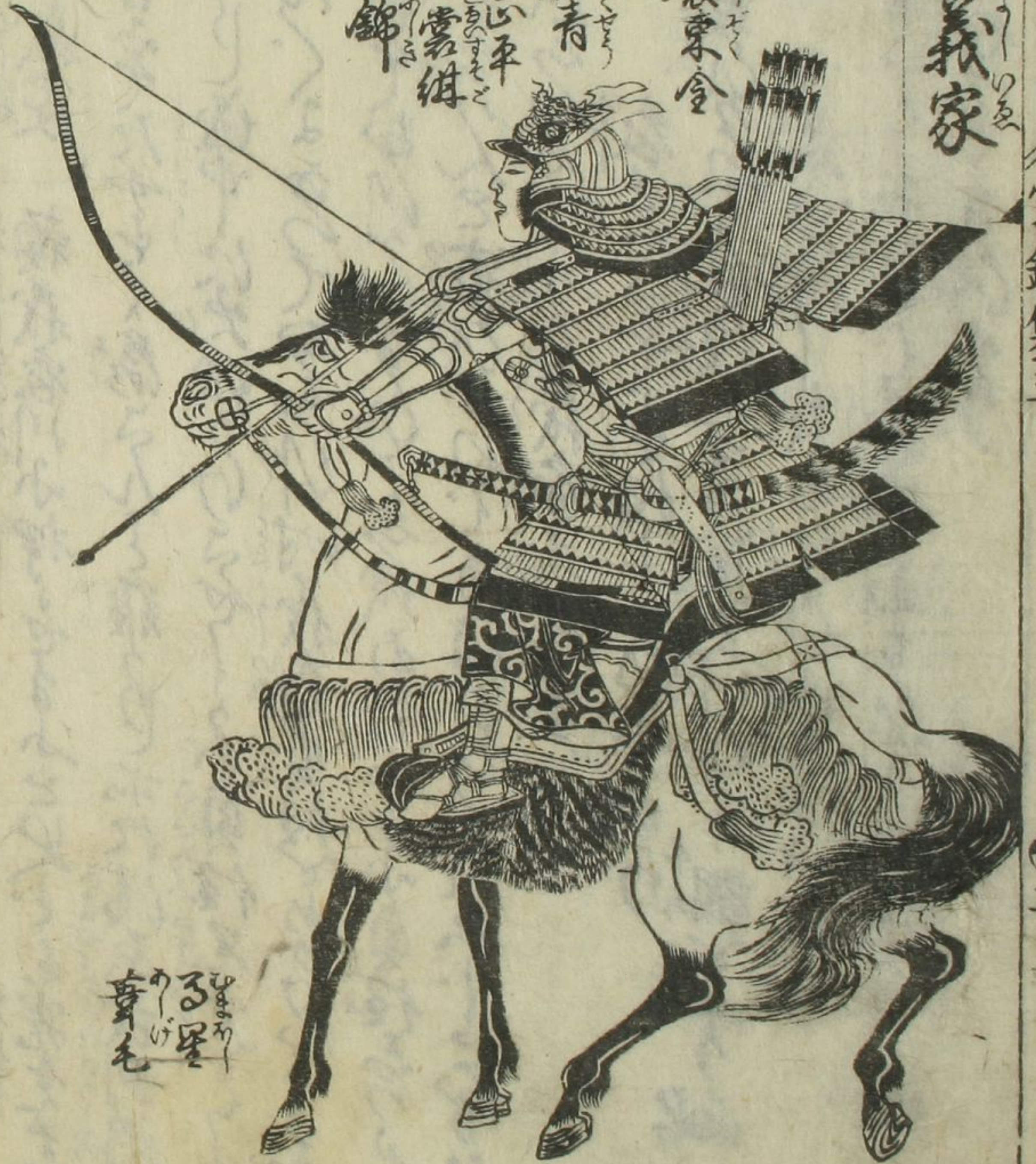
頼義衣川小押(書)をよふことととを究(書)る

要害めてた中とく落(書)さんと難(書)りし所に清原武則(書)と  
めぐりし城中に火(書)けりせり久(書)責任(書)兄(書)身(書)とめ  
さんくよあつておらひ(書)時(書)義(書)家(書)自(書)任(書)とめ(書)け(書)か(書)る(書)夫  
を(書)弟(書)て(書)お(書)け(書)り(書)け(書)り(書)し(書)て(書)義(書)家(書)自(書)任(書)と(書)め(書)け(書)か(書)る(書)夫  
返(書)と(書)云(書)り(書)ん(書)ど(書)宣(書)ひ(書)た(書)れ(書)ど(書)自(書)任(書)と(書)の(書)れ(書)ぬ(書)と(書)書(書)ひ  
返(書)然(書)ち(書)あ(書)つ(書)め(書)り(書)う(書)と(書)義(書)家(書)大(書)善(書)あ(書)く

夜(書)美(書)い(書)そ(書)て(書)ち(書)ほ(書)ら(書)ち(書)ひ(書)ふ(書)事(書)り  
と(書)言(書)ひ(書)た(書)れ(書)ど(書)自(書)任(書)と(書)る(書)れ(書)鼻(書)と(書)引(書)ち(書)り(書)朝(書)と(書)あ(書)り(書)向  
年(書)と(書)終(書)り(書)糸(書)の(書)札(書)乃(書)物(書)事(書)と(書)り  
と(書)付(書)り(書)り(書)も(書)せ(書)ど(書)義(書)家(書)善(書)多(書)ひ(書)と(書)成(書)さ(書)り(書)迎(書)く  
引(書)ち(書)り(書)の(書)ひ(書)たり

源義家

甲裝束全  
地白  
朝緑青  
吹返正平  
澄紅雲緋  
赤地錦



子星  
奇毛

安倍貞任生年

三十日幕長九尺又寸  
腰圍七尺四寸

出立緋地錦  
純頭甲捍草威之禮



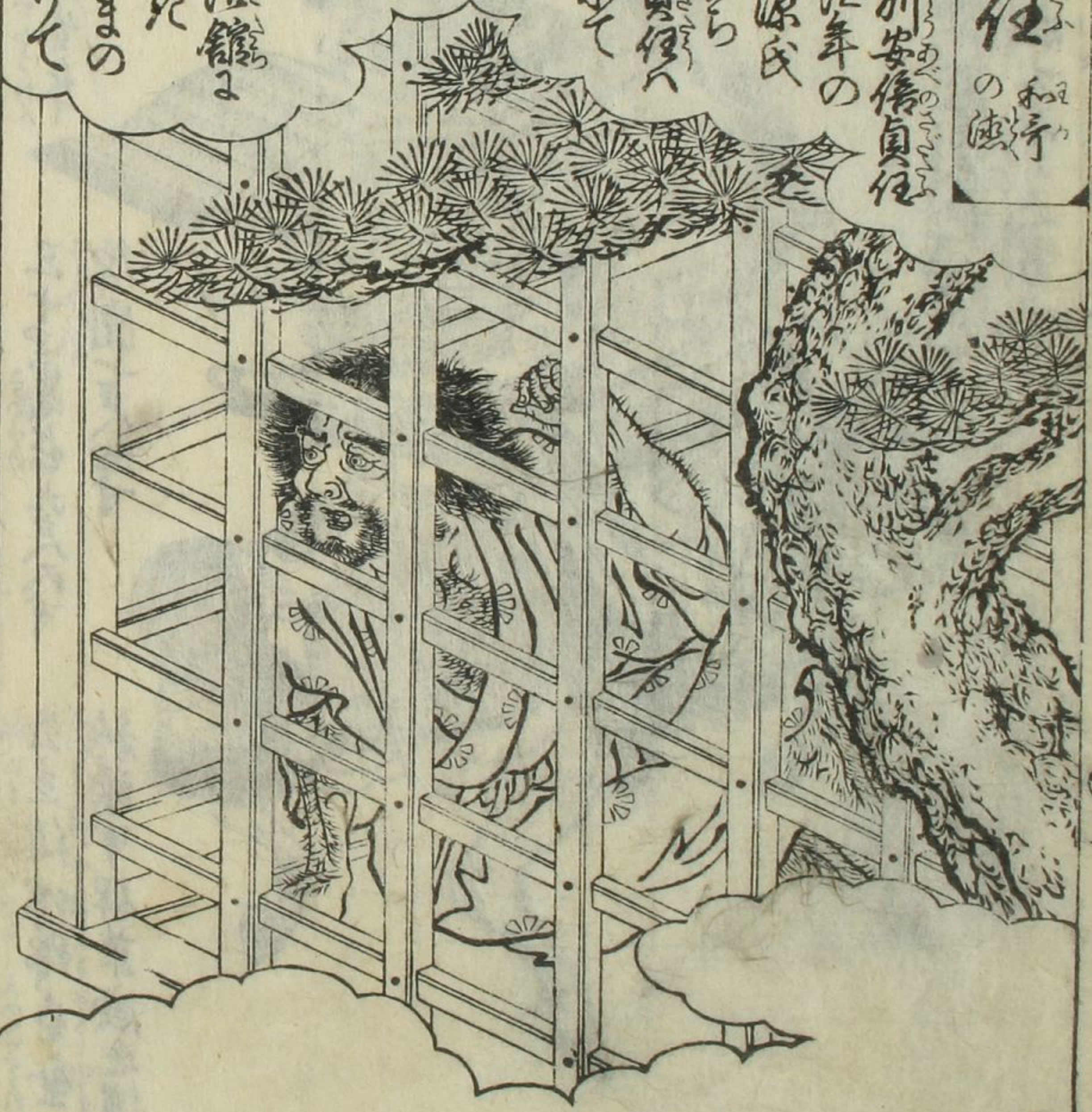
容貌魁偉皮膚甚肥白  
東國一之壯士大力之男也

馬場式三

かうのひのふ  
 の徳

源頼義奥羽安徳頼朝  
 の御孫と九年の

うらむは源氏  
 終ふうらから  
 たまひ兄貞任  
 せんようち  
 うらむと  
 甲しと  
 ひのふ  
 りけと  
 五海濱の後  
 よりうの  
 あしと  
 殿と人あつまの  
 あびと



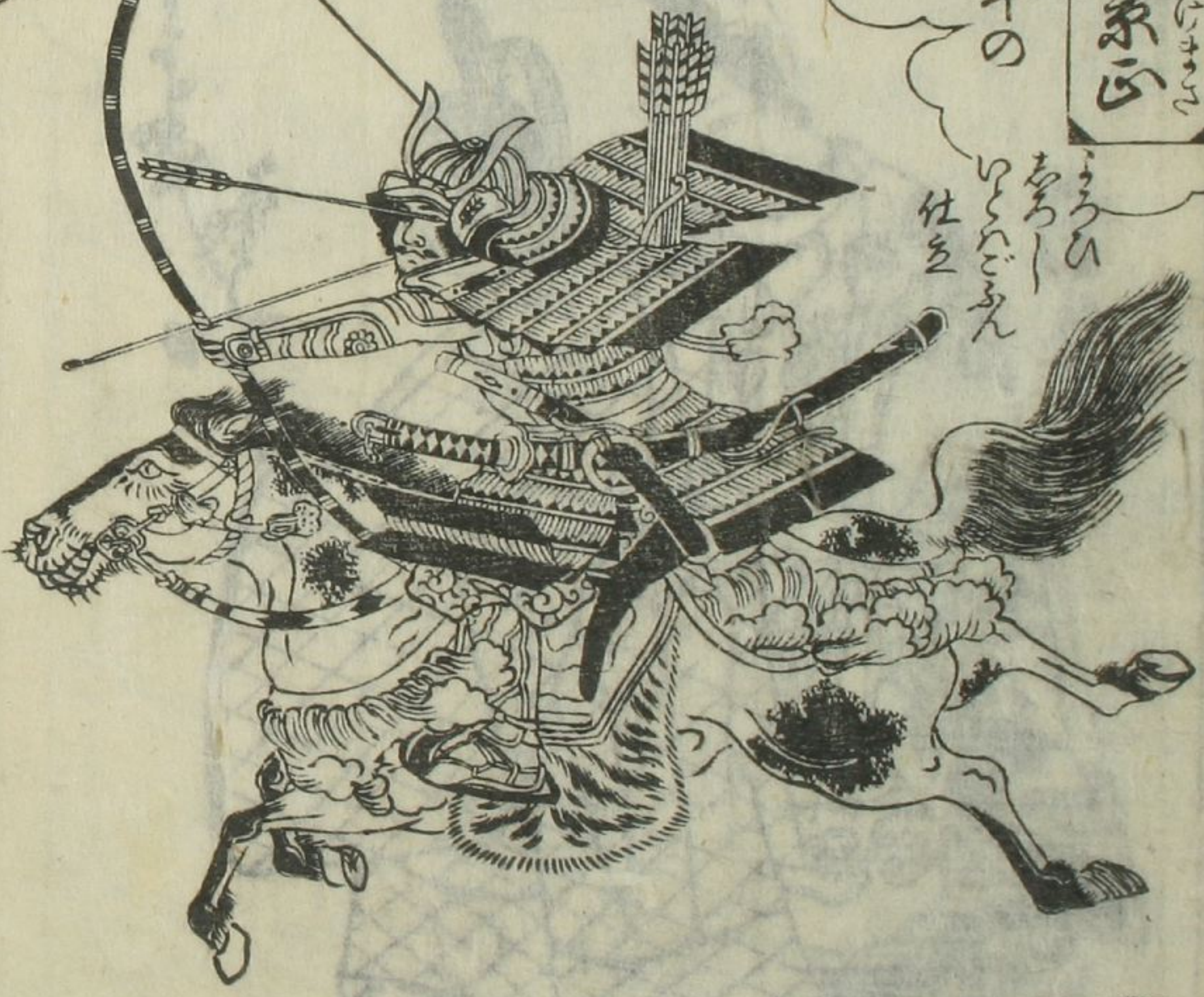
あそむん  
 さり  
 梅の  
 一枝  
 あれ  
 あり  
 あつ  
 つと  
 あつ  
 ひめ  
 つか  
 大や  
 りか  
 はあ  
 あ



丹朱仕立

横倉権六郎兼定

出陣して後三年の  
戦の時義家は  
あつたは生年  
十六弓矢打  
おるふ人色  
香海浜三郎  
小たの服と  
甲に射付  
られあつ  
敵とあつた  
一矢は射  
つる  
る劉の考也

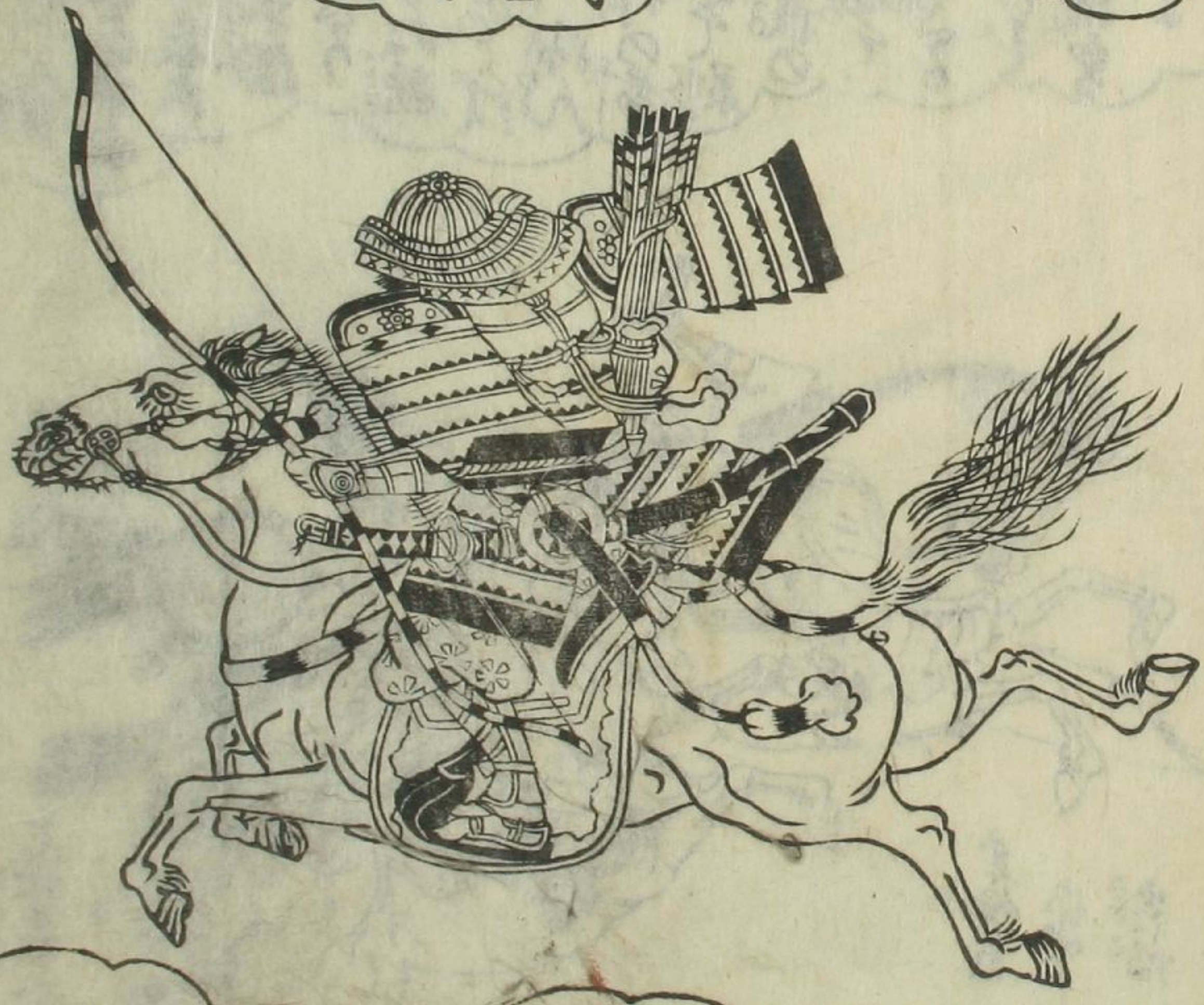


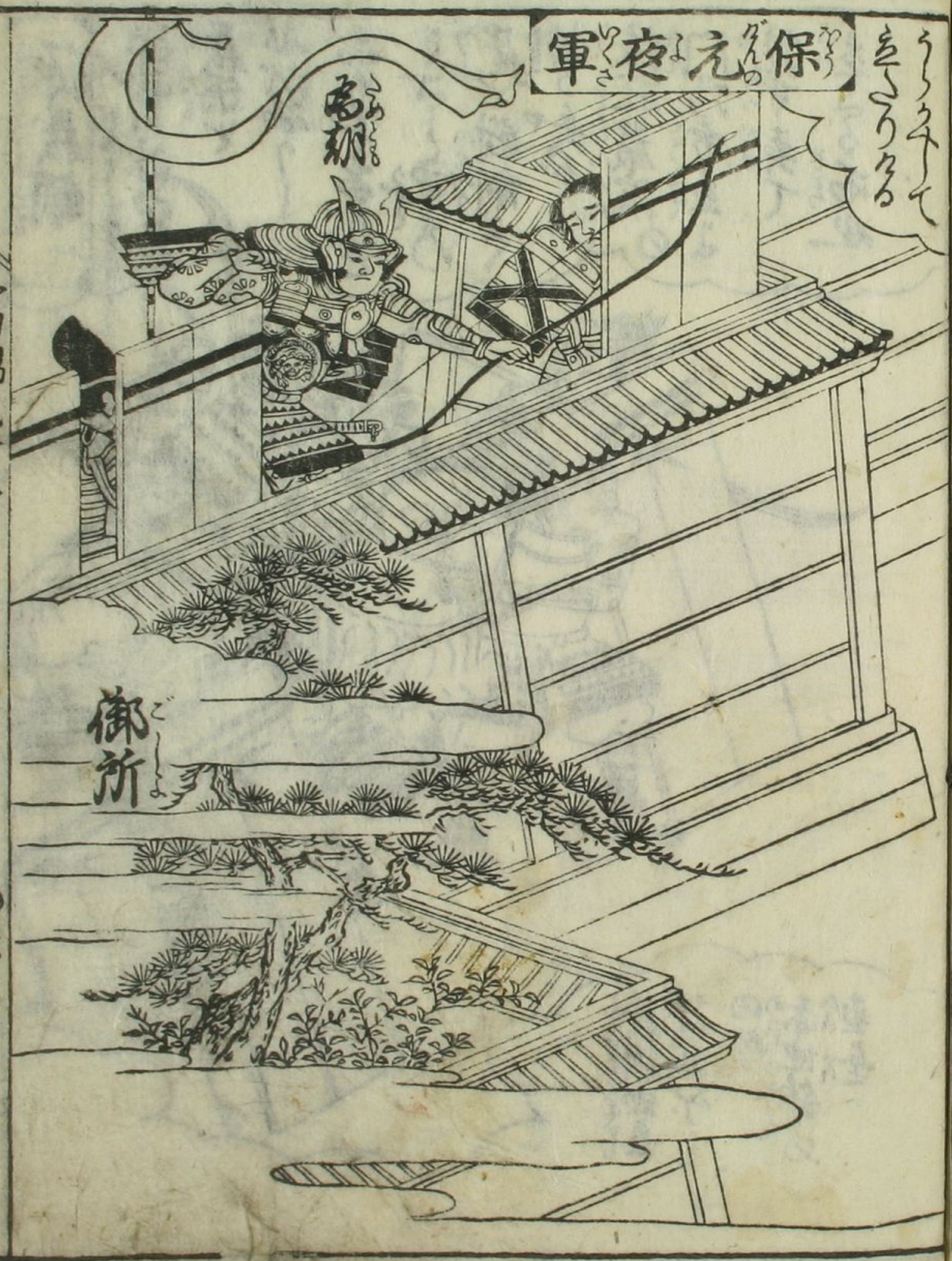
あつたは  
いふは  
仕立

兼定は  
地は  
すたんと  
めつる  
のこれ  
知の  
花乃  
鑑也

鳥海浜三郎

奥羽の偉人あり  
清原氏衛は  
あつたは  
弓矢也四人張小  
十四束射ひすま  
して射つり一矢  
兼定すつと弱す  
高の矢まのせんと  
弓矢はがうとつて  
あつたは  
ついで兼定は  
ころされしと  
あり





保元元夜軍

うらやまて  
まじりたる

御所

あつらふ所の源為義の男  
頼朝八郎為朝弓勢の由也  
守つたら保元又保元  
兄弟あり保元又保元  
保元又知と頼朝のうら  
高朝もともせは合ぬ敵  
とあるともあんならうら  
ゆじられたる矢一川頼朝  
信て見ると二奉作の弟  
進むるは高朝の尾中て利  
ごうに七すみ分の丸根の  
矢十束束あつて保元  
頼朝と頼朝を先に進むる  
保元はが御板をかけた  
頼朝は一竹の矢が放る  
保元はが頼朝の神は



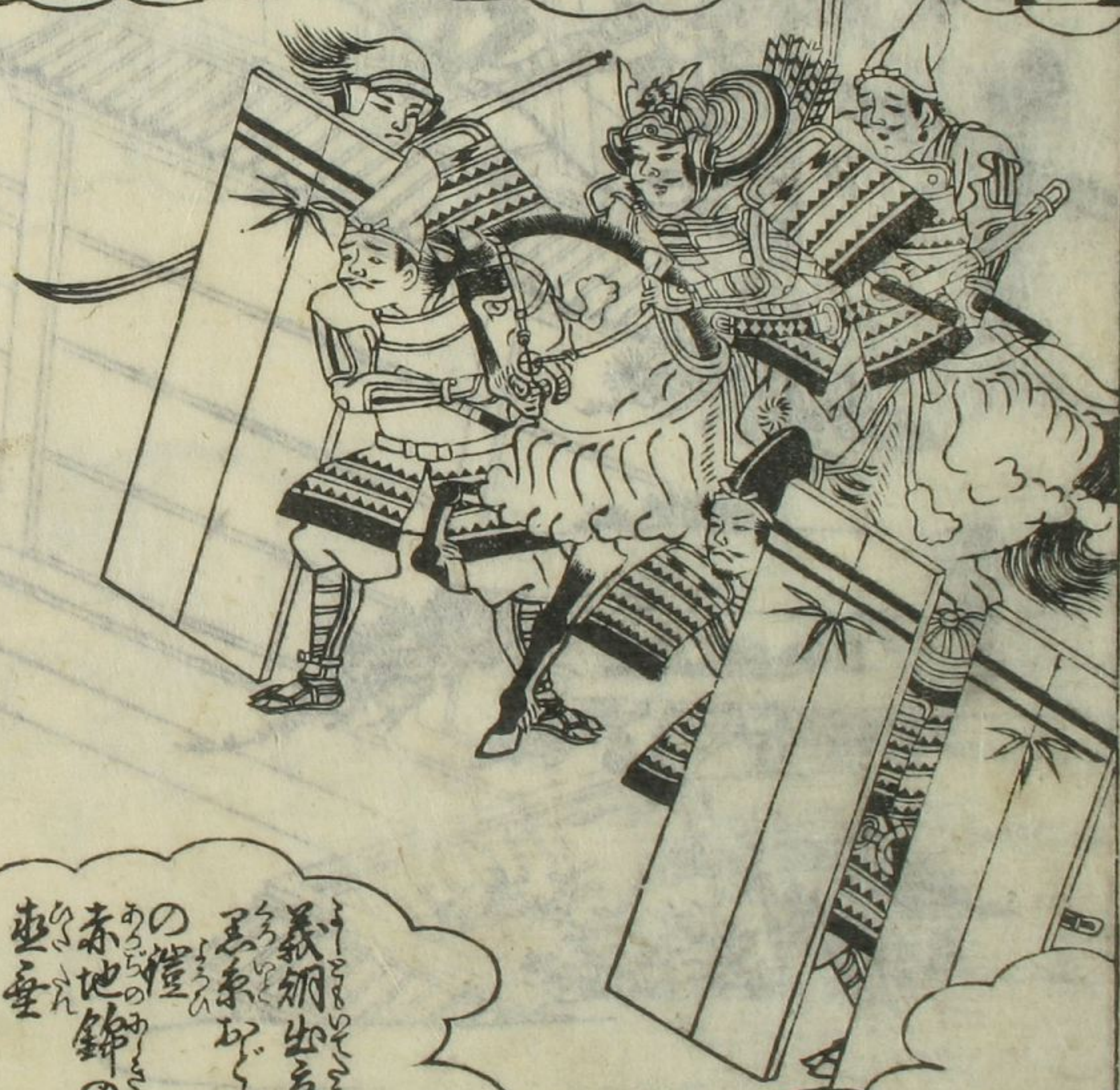
保元  
高朝

兄弟あり保元又保元

源義朝  
 赤地錦の  
 義朝の八幡の  
 禮と写し  
 梅板は獅子と  
 八川金物もす  
 編て金物  
 獅子あり  
 赤地の  
 熊皮の  
 扇鞘  
 也



源義朝  
 けりし源おの  
 義朝と  
 ありぞあんと  
 りざし甲乃  
 星と射刺と  
 作の矢が  
 法莊嚴院の  
 門乃方立よ  
 鏡中表て  
 立くる雨也



源義朝  
 赤地錦の  
 義朝の  
 赤地錦の  
 義朝の



兵庫頭源頼政

徳の事ハ  
徳人乃知  
おそれ  
及  
及  
及



おのゝ  
頼  
平  
右

朱す  
毛  
毛

下  
下  
下

持  
持  
持  
持

兵  
兵  
兵

僕野又郎

いふは  
僕野又郎  
徳持おくの  
物成さまで  
かたきと  
時よか  
どうぶふ  
酒多の  
彦平は  
吉人余りの大い  
あり僕野又郎  
兼つからまん  
まはげん



ひつくり  
せー  
与一といふ  
まの  
あ  
う  
与一  
か  
与一  
生年十六  
兼  
あ  
ん



川津侯野相撲之圖

川津三郎祐重八井坂次郎の長子  
去肥次郎が婿あり俵豆玉拍が勝りて氏義俵豆相撲乃ん  
すまゝの時侯野からず由ふして川津とお合ふまゝのりて也

肉交朱のさあせし  
下帯ろくせうりや  
金一のちんせう  
ごらんあんト入



川津三郎祐重八井坂次郎の長子  
氏義下帯朱金大紋

文覚荒行の場

十八歳也つらつかん一徳玉と向り熊野那智の湯よ七日の朝と教  
してうこれたるは極月廿日余り香智指と埋三湯の白糸なる  
ひとおれりさほどもたさづ不入てうこれなり二三日お其  
身岩本のどくあへとでに氣くさる時あんぐらせいの来り  
文覚とすくひものり是分り力けくくして尾の神護寺と建  
立せんと院の御所へまんぢん様とさげし成平家文覚とさ  
く俵豆の玉へあがりあつむいさどけりあつむいさとして平家と  
あつむいさ神護寺とたさるなりとむごうりその法源の朝船へ  
平治の軍にうらまけ是も俵豆に流されありける文覚事り  
あつむいさんとすむいさどくあへとけりあつむいさ義經の  
船艘と見せまのす朝船候よむせび居や我勅勤の身あはれあま  
甲斐あま今平家退付の院宣とあつむいさむいさ根と都さるべこと  
あつむい文覚実義共とあつむいさむいさ我ひそり小院宣と信てまのり  
せんとおろみけりあつむいさ流宣と場つりて朝船小そ後一なる



制多伽童子

又赤

又

又

山崎



祢羯羅童子

又

又

山崎

伊豆の院宣

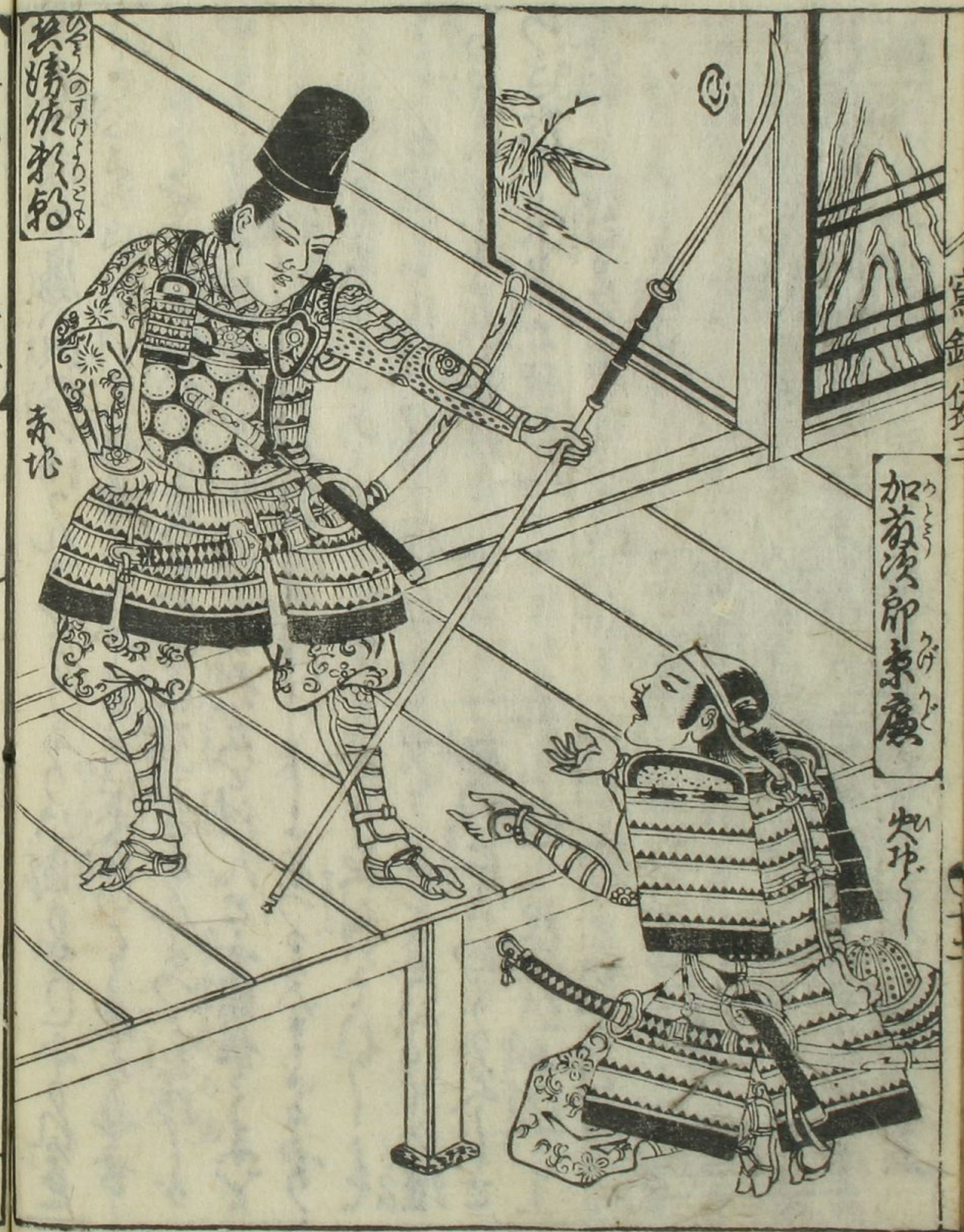


伊豆の院宣とあり  
 小糸時政とあり  
 先伊豆の目  
 代衆判友  
 義孝と判友は  
 せんとお糸雨り  
 お孫のり大とあ  
 ねも若柳あすは  
 使成糸せん  
 ちて向ひたり  
 されども  
 ちうらひ  
 水條とせあ  
 あぐんでひたり

加茂次郎兼廣の判のゆんさとうありけあひをりしおのれを  
 と心さつじなれを何事ありあやんとは東威のらる巻をカ業  
 作へんせも判の判小具足に小長刀つとあんよつと立給うが  
 かげりとも判の判あふ今判のその判友と判んとお糸作の本と  
 つりぬお打からしては彼に火張くぞと云つるがいまはとあり  
 も見へど受来ありとのこまふ糸うとありの判友それれりも  
 とて云業とらじりけあひ張りけりともあひりとて火張りの燈  
 白星の甲とつと判の判あをカより柄の長さ相うらふべりと  
 つたなまふ小長刀張り給りたり糸といもそれ向ひお糸り  
 對面と判友とてはるんは活んどうのあひりとのむむかげりと  
 されどもあまらにむられてりもつらつ首つぬりてまのせりといは  
 カと給りりしとてせりりお糸ととあぐり城中に事  
 かくせあいの判小火張りけはの小か給らとらとらりたる也  
 後土肥土屋屋三百餘家とせし格山は勢又安房と  
 徳一後り千餘人味方して終よ平敵とらむらばしあ

加前次郎宗廣

赤地



赤地 三浦一黨

金子十郎 家忠

三浦一黨夜登の城は終つて  
 とれ金子も島山を回つて  
 をせり大分金子うらまへ  
 人よすまき一けん  
 坂中よりひさげふ  
 酒と入て壺とひせ  
 牛一たり家忠とせ  
 二夜りて一礼して  
 夕一りの軍陣は酒と  
 勝る法也後るれあり  
 大分がふおといふ  
 法の礼と知まうとん  
 たり



三浦大外義明

三浦の二統の頼朝は力と合せんと二百余騎  
 出く出たは頼朝石橋乃軍に打ちつけ給ひ行方と相どり  
 中へ突くゆり乃中て畠山重忠は百餘騎は遠く山  
 平の浦中へつかひ畠山殿軍へも援又大勢中て夜笠の  
 味よとせも夷こりふ大外味方れきとてとん我は十三  
 より三乗ら夫たてし年七十九乗老くしてお芳村若  
 孫發せりは軍にのふる老後の面目あり義明は船のいこ  
 しくとせんといふひこれの袖せとれよのこゑがー引ま  
 ち力たりり腰は付るにうらのたれも小策とぬるの勢  
 くらあうらり既おぬんといふと子息の別當義澄又うま  
 あとと力てするのいふとつと一銭そののけと策あてうて  
 ども甲おれたいこまは強は城中へ引入りあれ大外法  
 率にいびと付て謀めり

三浦大外義明



三浦大外義明

難波津の梅 源義経の屋敷が修しそ年ふりける梅枝  
 見給ひ古老とて尋ねてふ仁徳天皇の御時いかに梅  
 とよほし梅ありし申されどゆきく人のおとらんや  
 無念とて割れとてかゝめ立られしなり



割れとて文  
 このころ南無也 折一枝造り守る  
 任文永紅葉之例 伐一枝去下勢一指





梶原二夜の廻

生田の森ハ  
平家十萬金騎  
乃大子ありしふ  
梶原源を弟季  
盛なる掛たつ  
枝も折て  
籠よじ  
出立  
とあやう  
ありしふ  
あつこれ敵よ  
遁とあつ大勝

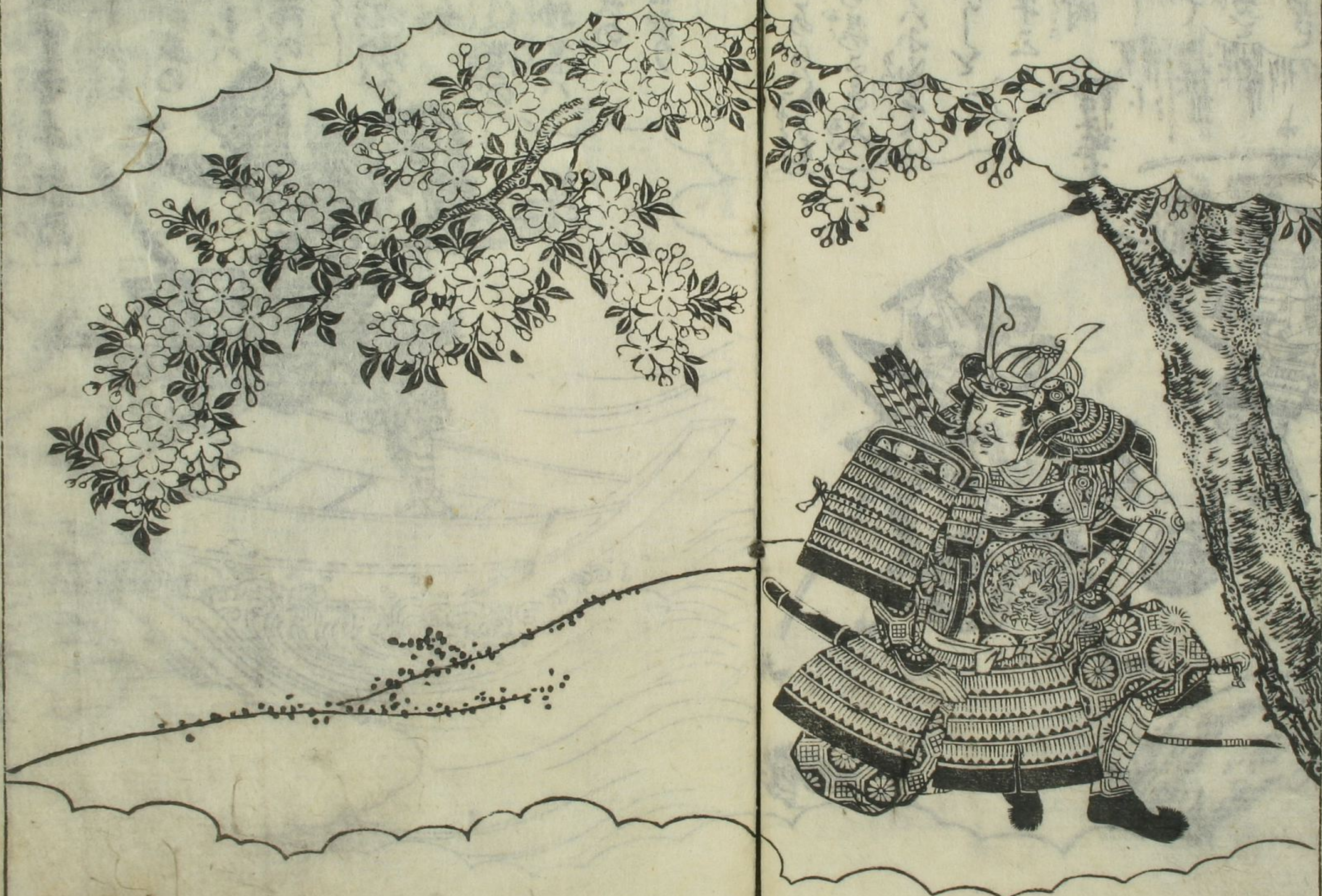


新こあら甲を  
うら落し大  
まふぬて  
戦ひしと  
父平二  
系時

返  
来て  
大勝と  
おら  
源をた  
四方の陣  
ゆりる



源を系時



徳富彦

徳富彦の  
 印書て本は下法と書とせは  
 花やと背をみるは忠度

寶金袋三

〇十三

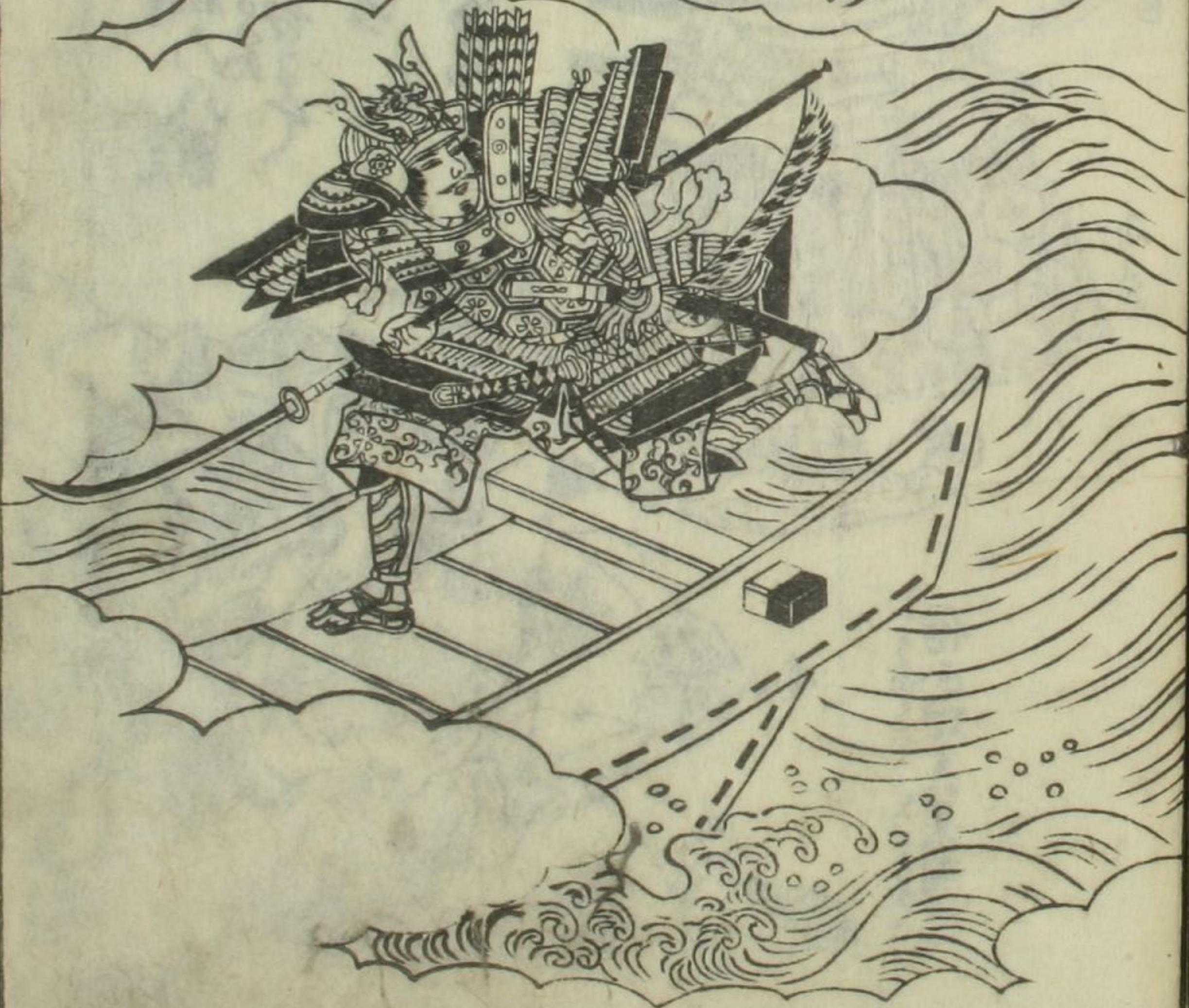
能登守平放經

教經出生  
唐綉威の  
禮毛ハ  
唐錦の  
おと  
赤地錦の  
赤雲  
宣紋禮の  
金物等ハ  
十六の  
葉あり



源判官義経

義経お立赤地錦の  
車坐家震海の禮  
は源能宅及判官の  
船小乗あつり判官と  
めうの飛でから  
義経かあつり  
あつれん  
は方の舟の  
ち二大なるの  
つりたるに中を  
飛うつたまふ  
勢ハあり



合那王の事

字ハ牛久保源の義綱ハ男  
 吾ク鞍馬山傍正谷ト  
 異人ト云ハ無法の  
 奥修ト傳吏トハハ

と云アリ  
 隆安ト具  
 生安ト具  
 甲ハク



二階堂土佐右正順

毎々... 土佐... 二階堂... 正順...  
 (Vertical text columns describing the scene and characters)

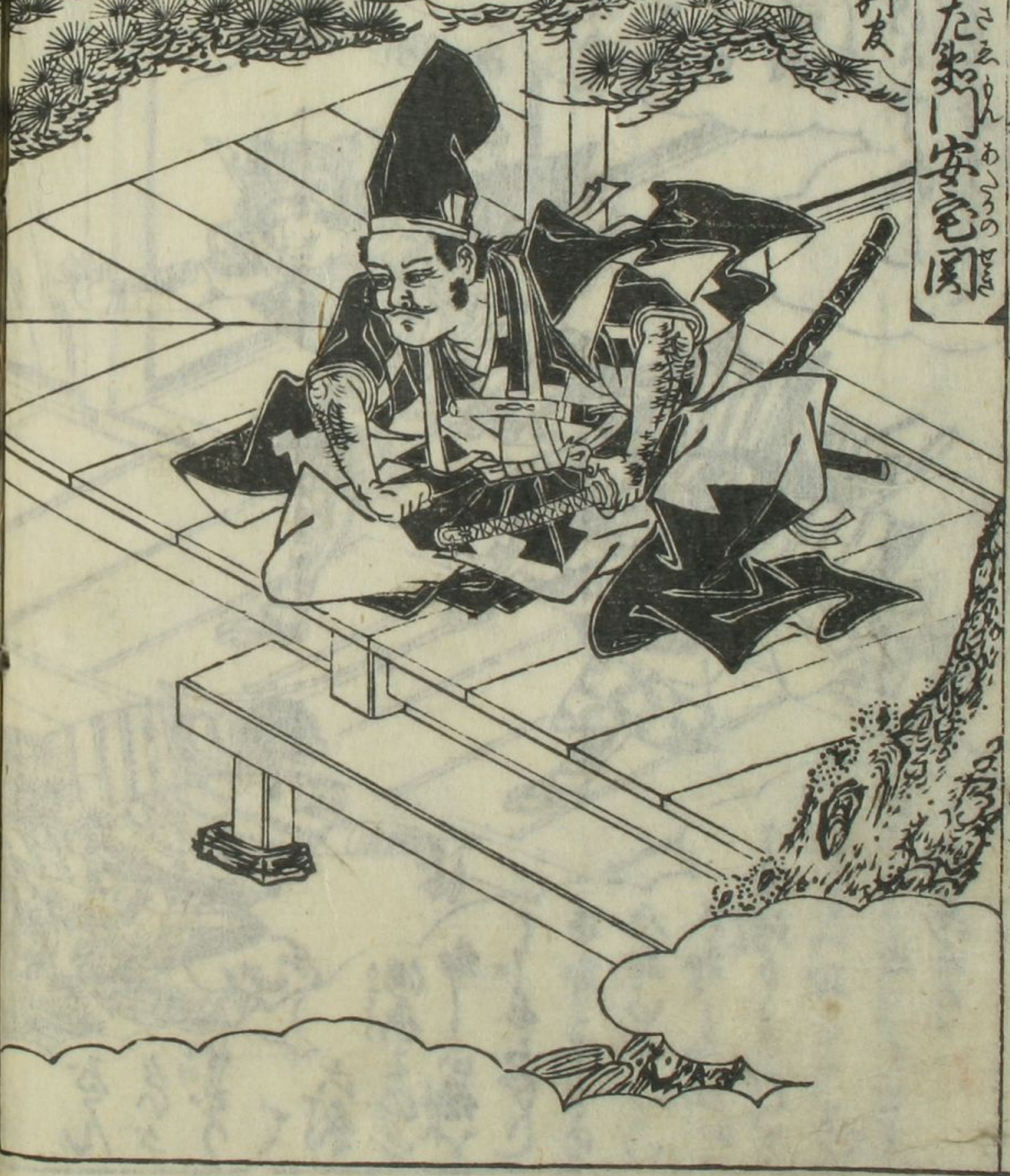






なり  
通  
め  
を  
酒  
を  
一  
命  
と  
か  
ん  
ど  
ろ  
う  
は  
り  
を  
れ  
し  
ん  
と  
な  
と  
な  
た  
後  
に  
利  
友

富樫  
た  
ま  
し  
安  
宅  
園



富樫  
た  
ま  
し  
安  
宅  
園

曾我時宗

いざ刀おひらき  
あしをこぼし  
あきくろり  
表帯の下へ  
さし入る  
ひき背そ  
ひきぶ  
曾我より  
大儀へこそ  
ゆきこあら  
かり



初江茶草摺

初江茶草摺  
時宗は海威一花金  
おどろき  
衣震る  
周帳をまき  
ころあり下へめん也  
先取付の時よ  
と下福の事あり  
掲げたり  
は時人下と  
朱を仕らるるあり  
又舎に二本丸  
りともあり  
又大儀の  
初江茶草摺  
後白舞



早稲田大学図書館

011688993387